

【氏名】陳 暢

【所属大学院】（助成決定時）京都大学大学院人間・環境学研究科 共生文明学専攻

【研究題目】ネットワークの形成と民族的アイデンティティの維持
—中国雲南省のアカ族の生存戦略の解明

【研究の目的】

本研究の目的は中国南部国境に住むアカ族に注目し、国境を横断する個々の人々が形成するネットワークの実態を明らかにすることで、彼らの「国家」という枠組みを越えたエスニシティのあり方を示し、アカ族としての生存戦略のあり方を明らかにすることを目的とする。歴史的にみると、アカ族は19世紀頃、中国からミャンマー、ラオスに移動し、20世紀初頭にタイに入ったとされている。当初の移動の要因はマジョリティであるタイ族に押されて、焼畑農耕による移動を続けたためとされるが、20世紀後半以降は中国政府の土地改革、大躍進運動、文化大革命といった政治的要因、またはタイの観光開発による雇用拡大、そして中国政府の経済開発といった経済的要因などによって移動を繰り返している現状がある。本研究ではこうした現状に着目し、国境を移動するマイノリティの実態の実態や変遷を明らかにすることを試みた。

【研究の内容・方法】

本研究では、中国雲南省シーサンバンナタイ族自治州の勐海県にある曼來集落と賀松集落のアカ族を対象とし、実地調査を行い、そこで得られた一次資料を分析した。2つの集落では、緊密な親戚関係、近隣関係による協業関係が強い結束となっている。

実地調査では、まず歴史的にみたアカ族の移動の理由や様態の変遷に関する聞き取り調査を行った。具体的には、2つの集落でできるだけ多くの人々に、①中国建国直後の土地改革運動期、②1950年代後半から1970年代にかけて大躍進運動、文化大革命期、③1980年代以降1990年代までのポスト文革期といった各段階の社会的背景の中で、彼らの移動の要因、その経緯と移動後の変化についてまとめた聞き取り調査を実施した。次に、1990年代から現在にかけてのアカ族の移動の実態を明らかにすることを試みた。移動先の中国国内の都市部（昆明、上海、広州）、そして2つの集落で近年の移動経験を持つ人々を対象にして、聞き取り調査や参与観察を行った。具体的には、現代中国の市場経済や開発政策の展開や近隣国家との関係の変容の下で、彼らの移動がいかに実践され、継続しているかを明らかにした。

【結論・考察】

以上に基づいて、アカ族の人々の移動の経緯と要因、そして現在の移動の実態について以下の点を明らかにした。①彼らは中国建国直後、共産党による土地改革で土地と財産が没収されることを恐れ、地主や富裕層の一部が国境を越えてミャンマーへと渡った。その後、社会環境が悪化するミャンマーから再び集団でタイ北部に移動した。②1960年代後半、文化大革命期になると、集落の宗教職能者や地主及びそれらの家族のほとんどは身体的な迫害から逃れるため、世帯全員でミャンマーやタイへ逃亡した。③1980年代から1990年代になると、一部の人々は貧困からの脱出と経済的な転機を求めて、①、②の時期に移動した後比較的経済的に成功した家族や親戚のネットワークを辿って国境を越

えた。また同時期には、逆に①、②の時期に移動した後あまり経済的に成功しなかったり、あるいは家族の元に戻りたいといった理由で、一部の人々が中国側の家族や親戚に中国政府の政策緩和の状況を確認し、再び国境を越えて中国に戻った。

以上のように、これら三つの歴史的段階におけるアカ族の移動の様態が明らかになった。①、②においては、人々は同じアカ族の父系系譜を持つ同族集団を頼り、また移動途中や移動先のアカ族の助けや情報を利用しながら、移動先での生活を開拓してきたという特徴がある。さらに、③での中国への「帰還」においても、同様にこうしたネットワークが重要な役割を果たしていることが明らかになった。同時に、彼らが中国の経済発展を背景に、他民族も含めた友人ネットワークを利用しながら、中国の大都市（昆明、上海、広州など）への出稼ぎのための移動を始めているという、多様な状況もみられる点を明らかにした。